日本忍法伝

第28回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第24章

韓国模様(からくに)

(一)

斉明六年、六六〇年十月、都大路は時ならぬ人出ににぎわっていた。韓国・百済からの使者が朝廷へまかりこすというのである。しかし、そのこと自体は都人たちがこれほど大騒ぎするほどのことではなかった。ただ今回の百済の使者の来朝は、都の人々にとって珍らしい見ものを伴っていた。それは人間、しかも百数十人の唐人たちというのである。

さわめきのうちにやがて、百済兵と朝廷さし向けの兵とにとり囲まれた大きな行列が都へ入った。ざわめきは都の入口から、行列の進むに従ってしずまり、その後でまたささやきとなった。

その人々の中に弓月もいた。弓月は昨夜、百済船の中に忍び込み、ひそかに百済の使者たちの話、そしてとらわれの唐人たちの話をきいていた。それによれば、どうやらこの唐人たちは、百済と戦って捕虜となった者たちらしかった

はるか唐の国から朝鮮半島へ攻め入り、そこで捕虜になった者が、更に海を渡って大和へ送られる。この唐人たちは二度とふたたび祖国の土をふむことはまずあるまいと思われる。それだけに、昨夜の唐人たちの話はしめっぽかった。

しかし、弓月は彼らの話の中で、朝鮮半島の情勢が大きく移り変わろうとしていることを知ったのである。

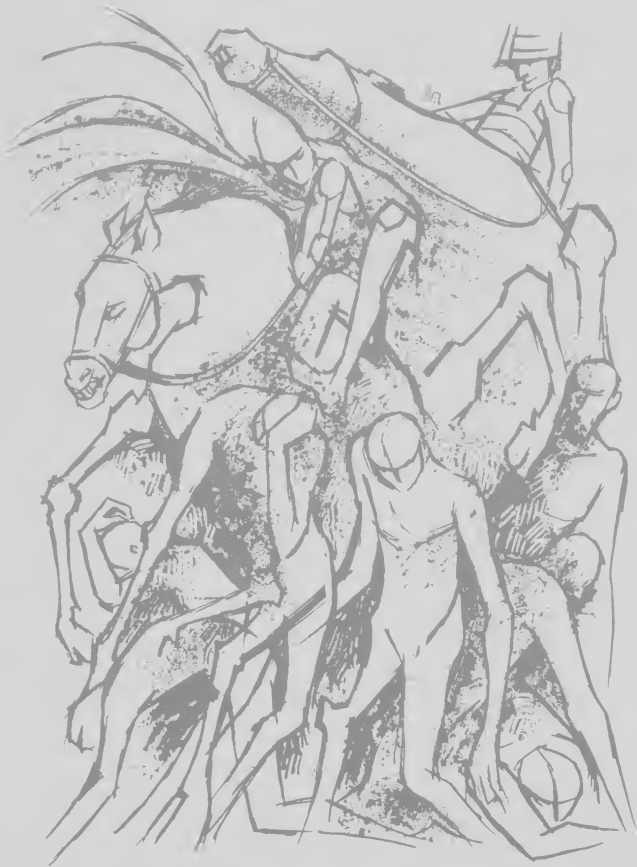
行列はやがて皇居へ入った。そのとき、弓月は、ひそかに唐人の一人を倒し、その服を着て唐人の中にまじっていた。

皇居の広場へ入った。と思う間もなく、その一角から鋭い声がとんで、いきなり砂塵と共に一群の騎馬隊がとび出した。その先頭には弓月がかたときも忘れたことのない男の姿があった。背から旗の如く、羽の如くひるがえる白い大きな布――それは能登軍団の白布にほかならなかった。

白布指揮する騎馬隊は、まるでその力を誇るかのように、唐人のまわりをはげしくまわり走った。もうもうたる砂塵に、一時は百人余の姿もかくれるかと思われるほどであったが、やがて白布の命一下、能登軍隊は、その騎馬のひずめで、今にも唐

人たちをふみつぶさんばかりの勢いで、その頭上をヒラリ、ヒラリと越えはじめた。
唐人の間から、得体の知れぬ悲鳴が上がった。ひづめに叩きつけられるもの、身体の上へ馬の脚をうけてうめくもの――それは恐ろしい馬術競技であった
唐人に交じって弓月は唇をかんだ。そして自らの頭上を越える馬の脚へ、すばやく松葉の如き鉄の針をうちこんだのである
数頭の馬が、ころげた。
白布ははっと馬からおりると、ころげた馬の脚をしらべた。
「やめろ！」
弓月は叫んだ。
「この中に不穏分子がまじっているぞ！　さがせ！」
瞬間、能登軍団の兵士たちは一斉に剣をぬいて唐人たちの中へとびこもうとした
その時だ
「うるさい！」
宮中の階段の上に立っていたのは中大兄皇子である
白布、韓国（からくに）からのお客様だ。いい加減にせい！」
「しかし……」
「百済の方、お待たせしました　どうぞ」
それだけいうと中大兄の姿は宮中に消えた。弓月はじっとその大きな背中をにらんだ。そして中大兄の顔を心に刻みつけた
「今にみていろ！」
白布は、百済の使者をつれて宮中へ入っていった。あとには、能登軍団の兵士たちが、くるりと唐人をとりまいて残った。
弓月は、しばられた姿のまま、そっと身をすらせて、唐人のひとりに近づいた。ゆうべこの男だけがたどたどしくはあるが弓月と同じことばを話すことができるのを知ったからである。
「動かず、静かに」
弓月はささやいた
唐人はびくっとしたように弓月を見た
「唐は何故に百済を攻められたのか」
「……」
「きけは、新羅との共同戦線であったという。何故、新羅と手を組み、百済を攻めたのか」
「……」
唐人はおびえたように弓月をみていたが、やがてホソリとつぶやいた。
「騎馬の民への恨み」
弓月はしっかりとうなずいてみせた。
「おれもまた騎馬の民への恨みを持つものだ」
唐人の目が輝いた。
「しかし、新羅は百済と同じ騎馬の民の国と知るか――」
「新羅と手を組んだは便法。唐は、いつの日にか新羅をも討つ」
「……」
「これすべて、騎馬の民への恨み」
一瞬、弓月の目に極彩色の絵巻が浮かんで消えた。それは大草原を疾駆する騎馬隊であり、中国の王城へなだれをうって突入する騎馬隊であり、そして、朝鮮半島へ怒濤の如く進撃する騎馬の群であった。
「これすべて、騎馬の民への恨み」

[illegible]目は、あ[illegible]

（二）

「何！ 百済が新羅と唐の連合軍に滅ぼされたというか！」

中大兄は、玉座からすっくと立ち上がって叫んだ

「滅ぼされた……いや、まだ完全に滅ぼされてはおりません」使者は沈痛な顔で答えた。

「しかし、王城は奪われ、義慈王と王子はとらえられれば滅びたも同然ではないのか」

「はい。なれど、鬼室福信が兵をおこし新羅とたたかっております。皇子！ 何とぞ、援軍を、百済を救うため軍を、お興し下さいませ」

中大兄は、よろめくように階段付近まで出ていった。秋の澄んだ空には雲が流れていた。この雲の流れる果てに、我が故郷がある。その故郷は、いま異国の敵によって滅ぼされんとしている。

「バカな新羅め！」

中大兄はうめくようにいった。

高句麗、新羅、百済、そして大和――それこそ東洋の一角に厳としてそびえた騎馬民族の連合国家であったではないか

中大兄は父祖の血と汗を思った。

蛮人と呼ばれ夷狄とさげすまれながら、戦いに明け戦いに暮れた、騎馬民族の祖先たちは、ようやくにしてこの四つの連合国家を建設したのだ。

しかし、時はうつり、星が変わると共に、四つの国の為政者たちの間に、連合国家の意識は徐々にうすれていってしまったのであった。

そして、いま、父祖の血を最も強くうけついでいるのが、皮肉なことに父祖の血から一番遠さかったところにいる大和朝廷のみということになってしまったらしい。

「バカな新羅め！」

何故、任那まで私せんとしたのか。元はといえばすべて同じ民のものだったのではないのか！

「王子様！」

百済の使者の声に、中大兄ははっと我にかえってふりかえった。

人質の百済王子豊璋に、使者はしっかりとしがみついていた。

「王子様！ 国へお帰り下さいませ！ そして百済再興のため、何とぞ、何とぞ」

あとは涙であった。

「豊璋殿」

中大兄は静かに歩みよりながら、いった。

「わが大和朝廷もできるかぎりのことはする。豊璋殿、お帰りなさい、そして戦うのです」

豊璋の目は、気弱にまたたいた。

そしてふっとうしろをふりかえった。絹のすだれの向こうに、白い肌があった。

「額田王……」

中大兄は心の中でつぶやく。

「とうとう、百済の王子まで、その肌のとりこにしてしまったのか」

（三）

五六二年、任那の日本府は新羅のためにうちほろぼされた。

それが、いわば、朝鮮半島と日本列島を結ぶ騎馬民族連合国家が崩壊する最初のしるしであった。

朝鮮半島は、北から高句麗、百済、新羅と三つの国家によって領有された長い時間があった。もともと同じ民族の連合国家であったこの朝鮮三国と日本の大和朝廷は、兄弟のように親しい間柄であった。

『旧唐書』にいわく「日本もと小国、倭国の地を併す」と。その三国にはさまれた任那の日本府こそ、後に倭国、すなわち日本列島を併合した大和朝廷、発祥の地であったのだ。

しかし、中大兄皇子の嘆きの如く、年と共にこの騎馬民族連合国家の統一は乱れて来た。朝鮮半島一統をめざす新羅は、すでに中国大陸に厳然とした国家を築いている唐と結んだ。

六四九年（大化九）、新羅は服制を唐にならい、翌年には年号までも唐からもらって、その恭順の意を表明した。

これに怒った高句麗と百済は、六五九年（斉明五）、時の新羅王武烈をいさめる意味で兵をおこし、新羅二十余城をまたたく間に席捲した。

このとき、武烈王が連合国家意識をとりもどせば半島の姿は変わらなかったはずだ。しかし、逆に怒った武烈王は、ただちに唐に救援をたのみ、あくる六六〇年、唐との連合軍を百済にすすめた。

唐は左驍衛大将軍蘇定方を大総官

た、武烈の子金仁問を副大総官とする。水陸十三万の兵を百済に叩きこんだ。これに勇を得た武烈は、自ら新羅軍の陣頭に立って戦ったのである。唐は北から、新羅は南から、共に進軍しつつ、まず、新羅軍が、忠清南道の黄山原（連山平野）で百済軍を破れば、一方唐軍は、熊津江口（錦江河口）で戦い勝ちを納め、両軍合流して、百済の都、泗沘城（扶余）をとりかこんだ。

百済王、義慈は王城をすててのがれ、熊津城（公州）へうつったが、ここも陥落、ついに七月十八日、王と太子隆は捕えられて唐に送られ、ここに百済は滅びた。

しかし、国は滅びても、人の心までは滅びなかった。原野の各地に百済の遺臣たちの烽起があいつき、中でも有力だったのは、義慈王の従弟鬼室福信であった。

すでに、唐は、百済の三十七群、二百城、七十六万戸を領土とし、都督府をおくほどに納めていたが、鬼室福信は敗兵を集め、任射岐山（任存城山）にたてこもり、しつような抵抗をつづけた。

一方、福信の戦いに呼応する如く余自進も兵を上げ、熊信城にたてこもった。

そして十月、鬼室福信は唐の捕虜百数十名を貢物として大和朝廷に使者を送り、その救援と人質の王子、豊璋の返還を乞うたのであった。

危機到来す。騎馬民族連合国家の浮沈、目睫にあり。

（四）

「私は反対ですよ、皇子」

老いたる女帝は力なげにまずいった。

「過去のことはいざしらず、何を今更、海の彼方の異国へなど……」

「みかど！」

中大兄はどなった。

「過去は知らずとはみかどのことばとも思えません！」

その大きな声は廟議に参加したすべての貴族たちの胸にまでズシンとこたえた。いや、中大兄は、女帝を怒鳴ることによって、すべての人々の意見を封じようと考えたのである。

「でも、中大兄、いま新羅と戦うことは、あの強大な唐を敵とするこ

とに他なりません。この大和朝廷に
それだけの力が、果して……」
「ある！」
また、中大兄はどなった。
「兄上」
大海人皇子が口をひらいた。
「あるといわれますが、韓国は海の向こう、救援にいくにはます、多くの船を集めねばなりません。しかし、たび重なる宮殿の造営、皇居の修復のため、人民たちはこの無謀な計画をだまって許すでしょうか」
「戦う前におじけをふるうな！ いかにもお前のいうとおり人民は反対もしよう。そうだ！ 百済救援の戦いはまずわが大和の国内から始る。更に聞け！ 高句麗、新羅、百済はかつてはわが大和朝廷の兄弟国であった。いや、むしろ弟だったといってよい。何故ならば、建国の祖の中心は、この三国を平定しつつ倭の地に渡ったからだ。韓国三国の建国の祖はいわばわが大和であるといっていい。すでに知る如く、わが国建国の祖崇神天皇は御肇国天皇、又の名を所知初国之御真木天皇、あるいは初国所知美麻貴天皇と書かれているハツクニシラスミマキノスメラミコト、このミマキは、ミマにあった王城を指す。ミマ、即ち任那――、崇神天皇こそ任那に王城を持った、建国の祖である。その正系の我が大和朝廷が来たと知れば、百済人民の勇気ももり上がり、必ずや新羅の中にも我らに味方するものがあらわれるはず……皆の者！ 我が御世にあって父祖百年の計をついえさることかできようか！」
中大兄は、他の何者の発言も許すまいと裂迫の息づかいで語りつづけた。
その声をきいてほほえんだものがいる。宮殿の床下にひそんだ弓月である。
行くがよい、韓国へ！ 天皇も、中大兄も、大海人もすべて行くがよい、しかし、二度とふたたび、この場所に坐れると思うな。貴様たちが韓国へ出かけたあと、ここに坐るものは、正統な倭の民だ。そして、いま、スメラミコトの坐る位置には、あの銅鐸がおかれるのだ。
そのとき、四百年ぶりに、この国は、朝夕銅鐸の音がひびきわたるのだ。そして、ゆたかな国となるのだ。

（五）

六六一年（斉明七）の一月六日、六十八歳の女帝斉明天皇をのせた船は、難波の海にうかんだ。
船団のなかには、馬と男ばかりの船があった。いや、女がひとりいた。能登軍団と玉櫛である。
馬の糞の匂いがムッとたちこめる船底で白布は玉櫛を抱いた。玉櫛の身体のすぐ下を、船底の板をへだてて、波の音が心臓にまでひびいた。
白布の狂ったような愛撫の中で、玉櫛は目をつぶり、哀しみに耐えた。
倭が過ぎる。倭が遠ざかる。わたしのイズモ！ 私のヤマト！ それが、刻一刻と遠ざかっていく。
「玉櫛」
あつい勢で白布はいう。「今に見ておれ、わが父祖の地をみせてやるぞ、父祖の地はこんなちっぽけな所ではない。韓国から、唐へ、そしてその先は果ても知らぬ大陸だ。玉櫛、その大平原へおれはいくのだ」
白布は笑った。
「しかし、バカなことに、その地